



ASLE-Japan / 文学・環境学会

NEWSLETTER

The Association for the Study of Literature and Environment in Japan

March 20, 2002 No. 12

湖水地方

は、日本で最もよく知られたイギリスの観光地かもしれない。数年前、オクスホルムからウィンダミアまでの車中で、乗客全員が日本人で驚いたことがある。しかし多くの日本人はウィンダミアから湖を渡りヒルトップ、グラスミアのダヴコテジと訪れただけで、この地域を離れるようである。日本人にとっての湖水地方は、依然としてワーズワス(William Wordsworth, 1770-1850)とピーターラビットの地と言うことであろうか。勿論湖水地方はイギリス人にとっても特別の土地で、この地に縁のある文人の名声も、彼らにとって魅力の一つである。しかしそれ以上に彼らを惹きつけるのはこの地の自然であろう。週末に車でやってきてはその場で着替え、終日丘陵

地(fell)を歩き回っている人をよく目にするが、彼らにはこの地の自然こそ目的なのである。

だが人々が自然美を求めてこの地域を訪ね始めたのは、そう古いことではない(西洋人が自然美に目覚めたのが近代であることを思えば当然かもしれないが)。女性旅行家シリア・ファインズ(Celia Fiennes, 1662-1741)は1698年に湖水地方を旅しているが、彼女の旅行記には、景観の印象を審美的に記述する語が殆ど含まれていない。彼女がウィンダミアに足を運んだのは、この湖でとれる美味なサケ科の魚チャーに惹かれてであった。¹ イギリス人が景観を求めて湖水地方に分け入るようになったのは、崇高やピクチャレスクなどの趣味が広

ワーズワスと湖水地方旅行

小田 友弥 (山形大学)

まった18世紀後半であった。そして湖水旅行の流行と共に、旅行者が自分の印象をまとめた旅行記や、旅行者のための案内書が多数出版されることになった。² こうした刊行物のなかには古くはバドワース(Joseph Budworth, 1756-1815)の『湖水地方二週間ぶらりある記』(1792)やゴシック小説作家ラドクリフ(Ann Radcliffe, 1764-1823)の旅行記(1796)、新しくはウェインライト(Alfred Wainwright, 1907-91)の7冊からなる『湖水地方丘陵地の絵入りガイド』など、ネイチャーライティングとしての評価を待つ作品が少なくない。



しかしこの点については別の機会に譲り、ここではこうした旅行記が、ワーズワスと湖水地方旅行の関わりにどんなサイドライトをあてるかを若干考察してみたい。

湖水地方とピクチャレスク旅行についてのワーズワスの考えが最もよく窺えるのは『湖水案内』(1835)の中心部「湖水地方の景観のあらまし」だが、ここで彼はこの種の旅行を、この地方に憂慮すべき変化をもたらすものとして否定的に捉えている。湖水地方の美にうたれた旅行者が、周囲になじまない住居を建てて定住したり、当時流行の景観改良を持ち込むことが、ステイツマンと呼

ばれる農民と自然の長年の交流により培われた景観を破壊するというのである。この害悪の侵攻を阻止するためにワーズワスは、「自然の精神に従え」と忠告する。勿論、この「自然」(つまりは伝統的景観)に従うことが求められるのは、移入者だけではない。この時代には景観改良と同時に農業改良も進行し、利益の出る外来樹木の植林なども盛んに行われていたが、こうした営為も自然から逸脱するものであった。湖水地方の伝統的景観を尊重するワーズワスのこの姿勢が、現代イギリス人が愛する湖水地方を育んだことは言うまでもない。

ワーズワスは、以上のようにピクチャレスク旅行を湖水地方への害悪とみなしたが、ピクチャレスクの原理そのものにも極めて批判的であった。その点がよく現われているのが、自身の青年期の精神的危機について語った、自伝詩『序曲』(1805)の第1 1 巻である。ここで彼は、フランス革命とそれに続く混乱の中で分析的理性を指針としたために、人間が作った審美規則を自然に押し当てるピクチャレスクに染まり、自然との想像力に立脚した関係を見失ったと述べているのである。



従来のワーズワス研究は、『湖水案内』や『序曲』のこうした記述を額面通り受け取ってきた。そして詩人は自己を見失った青年時代の一時期にピクチャレスクの流行に左右され、少年時代以来の自然との接し方から離れたが、まもなくその影響を脱し、湖水地方からその害悪の排除に努めた、と想定してきた。だが最近彼とピクチャレスク(旅行)の関係を問い直す動きがあり、そこに旅行記が一役買っているように思われる。

一例をあげてみよう。ワーズワスは『序曲』第1巻で、少年時代の遊びを介しての自然との交流を、印象的なエピソードを用いて描いているが、その一つに次のような内容の「ボート盗み」がある。少年時代にアルズウォーター湖畔に一晚逗留したおり、彼は無断でボートを漕ぎ出した。するとそそり立つ峰の背後から巨大な山が突然現われ、逃げ回る彼を追いかけるように迫ってきたのであった。このエピソードでの峰と山がアルズ

ウォーター周辺のどの山々に相当するのかは、ワーズワス研究上の未解決の問題であった。

1993年に発表した論考でリンドップ(G. Lindop)は、ベインズ(E. Baines, 1800-90)が『湖水地方への道連れ』(1829)で、ワーズワスのものと同種の体験を記録しているのを見出し、その記述を手がかりに二つの山を特定している。しかも、『道連れ』ではガイドがベインズに、この驚くべき体験をするための、ボートの特別な漕ぎ方を伝授しているのだが、それが「ボート盗み」でのワーズワスの漕ぎ方と類似しているのである。そこからリンドップは、そそり立つ峰の背後から巨大な山が突然現れる光景に触れるのはアルズウォーターでの旅行者向けアトラクションとなっており、あらかじめこの現象を聞き及んでいたワーズワスが、それを無料で楽しむためにボートを無断で漕ぎ出したと推定している。³ このように「ボート盗み」と旅行記の記述の照応性は、このエピソードの読み方

を変えるだけでなく、ワーズワスの少年時代と湖水地方のピクチャレスク旅行の関係についても再考を促す推論の出発点となっている。

私は最近湖水地方旅行記を中心に読んでいるが、こうした書籍を通

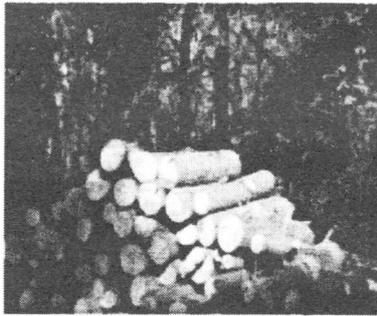
じて湖水地方旅行のコンヴェンションを知るにつれ、ワーズワスと湖水旅行には、『案内』や『序曲』の記述からは窺えない側面があると思うようになった。例を1799年暮れに一応の終結に達した2部『序曲』の第2部(これは1805年版の第2巻に相当するが、相違点も幾らかある)に取ってみよう。46行目以下でワーズワスは、遊びの中で自然の美しさに目覚めていく過程を(1)ボート漕ぎ競争(53-77)、(2)ファーネス修道院跡への乗馬行(98-139)、(3)コニストン湖航行(140-78)、(4)ウィンダミア湖上のフルート演奏(179-214)で説明しているが、これらのエピソードでのワーズワスの遊びに対応するものが、湖水地方旅行記にしばしば記載されている。

即ち(1)はダーウェント湖などで1780年頃から盛んに行われたレガッタと結びつくし、(2)の場面であるファーネス修道院跡は、18世紀の廃虚趣味を

書誌情報 1

くすぐる湖水地方随一の観光スポットであった。また(3)の場面はコニストンに設定された3つの眺望点の一つに該当している。さらに、山岳地が少ないイングランドにあって、湖水地方はこだまを体験できる数少ない土地だったので、旅行者は湖上で大砲を放ったり、ホルンなどの吹奏楽器を演奏してこだまを楽しんでいた。霊妙な楽器の音色は感傷的な旅行者に人気を博したので、フルートなどが夕方から夜にかけてこだまと関係なく演奏されてもいる。恐らく(4)はこの吹奏楽器演奏の模倣と思われる。⁴「ボート盗み」やこの4つのエピソードなどと湖水地方旅行記の記述のこのような照応性から、『序曲』で描かれているワーズワスの遊びのかなりは、湖水地方のピクチャレスク旅行とつながりを持っていたように思われる。

だが『序曲』の叙述にはこのつながりを窺わせるものがないので、ワーズワス研究においてこのつながりが真剣に取り上げられることはなかった。従って今後は、こうした隠れた照応性の発見に努めると共に、彼が何故少年期の自分と湖水旅行の関係を表面化させないのかについて究明することが重要だが、この地域への旅行者の流入を嫌う彼の感性が、実は旅行のコンヴェンションを介した自然との交流で養われたものだったとしたら、まことに皮肉な現象である。



¹ Celia Fiennes, *The Illustrated Journeys of Celia Fiennes c.1682~c.1712* (Exeter: Webb and Bower, 1982) 160-71.

² 湖水地方旅行記等の書誌的研究にはPeter Bicknell, *The Picturesque Scenery of the Lake District* (Winchester: St Paul's Bibliographies, 1990)がある。

³ Grevel Lindop, "Finding the Stolen Boat," *Times Literary Supplement*, March 19, 1993, 14.

⁴ この点については拙稿 "The 'Minstrel' Episode in Book II of *The Prelude* and an Amusement of the Tourists to the Lakes," *Notes and Queries* 246 (2001):124-7参照。

◆ *Rowing the Eternal Sea : The Story of a Minamata Fisherman* (Series: Asian Voices)

By Keibo Oiwa/ Narrated by Ogata Masato/
Translated by Karen Colligan-Taylor

October 2001, Rowman & Littlefield Publishers, Inc., \$24.95 Paper, \$65.00 Cloth <<http://www.rowmanlittlefield.com/Images/coursebook.gif>>

カレン・コリガン=テイラーさん (ASLE-J会員) による『常世の舟を漕ぎて—水俣病私史』(語り・緒方正人、瀬織書房)の英訳が出た。「狂い」を「自己解体」し語る、その言葉探しを別な言語でやり直したようなものであるから大変だっただろう。(加藤)

◆ 石川徹也『日本の自然保護—尾瀬から白保、そして21世紀へ』(平凡社新書、2001年9月)

尾瀬から海上の森まで、日本の自然保護の軌跡がコンパクトに綴られている。ダム築造、スーパー林道建設、国立公園運営の実態もよくわかる。自然保護の担い手を育てるには、環境をめぐる知識よりはむしろ感性を養うことが先決だという著者の意見には首肯。(結城)

◆ WWF ジャパン編『ようこそ自然保護の舞台へ』(地人書館、2001年12月)

WWF ジャパンの助成を受けた全国の自然保護団体多数の活動報告。干潟の保護、ヤマネ、ツキノワグマ等の動物保護ほか、多様な活動が写真つきで紹介されている。ホームページ情報もある。吉野川干潟の自然観察会の報告では、“干潟の心地よい感覚”が子どもたちの記憶に残ってほしい、との願いが記されている。大人の顔にも子どもの顔にも笑いが広がっている。実際に自然の中へ出かけてみることの大切さが伝わってくる。(中嶋ゆう子)

宮沢賢治賞 —2001年8月 花巻市発表—

【宮沢賢治賞】天沢退二郎 (明治学院大)

【宮沢賢治奨励賞】カレン・コリガン・テイラー (元アラスカ大学フェアバンクス校)

カレン・コリガン・テイラーさんは、「雪渡り」「よだかの星」の翻訳が、英訳として優れているだけでなく賢治の持つ作風の独自性を見事に浮き彫りにしている、と評価された。

ASLE-Korea Launched

Yong-ki Kang (Chodang University, South Korea)

Finally, ASLE-Korea was launched with more than 80 regular members at Sungkyunkwan University in Seoul on Oct. 27th, 2001. Professor Chung, Chung Ho (English, Chungang University) will serve as the first chairperson of the association.

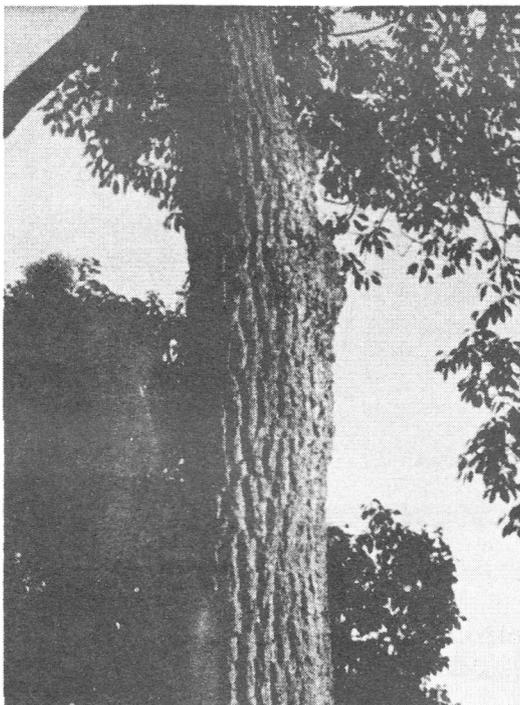
ASLE-Korea is not an upstart association. During the last two years, those who involved themselves in prompting Korean scholarship to have environmental awareness paved the way and it has also been nurtured by the innumerable silenced voices of inanimate as well as animate beings.

In tune with ecological openness and the dimensional expansiveness of environmental scholarship, ASLE-Korea membership is open to anyone that invests his or her concern in ecocriticism, environmental(or nature)

writings and environmentally oriented creative writings. Such a wide range of membership includes those scholars who major in Chinese, Japanese, Spanish, French, German, English, Korean and many interdisciplinary fields.

ASLE-Korea is planning to undertake various activities. First, it holds three or four regular conferences each year. The 3rd conference will fall on some day this April. Second, it plans to

issue a journal, *Studies in Literature and Environment* (a tentative name), two times a year. The first issue will be published this May. In addition, the association will publish *The Newsletter* regularly and distribute it widely so as not only to report what has happened to it and its members but also to attract the attention of nonmembers. Third, ASLE-Korea is also planning to have many other types of publications such as translations, theoretical collections concerning ecocriticism & environmental ethics, and collections of relevant Korean poems and short stories.



Fourth, being aware of the necessity for international cooperation and solidarity, ASLE-Korea will try to share wisdom and passion for environmental protection with the foreign associations like ASLE-

USA and ASLE-Japan. Lastly, ASLE-Korea will not confine its voices within its own discourse community. Going beyond the essential task of resensitizing people's lost sense of nature, it will attempt to get involved in substantial movements for environmental protection, domestically and internationally.

This recent establishment of ASLE-Korea has provoked, along with so encouraging

international acceptances, a wide range of ecocritical concern from Korean literary critics, humanities professors, graduate students, poets, creative writers and environmental activists. Such a latent environmental concern in the humanities was well-reflected in the enthusiasm of those many scholars who attended several sessions presented by ASLE-Korea in The 2002 Annual Conference of Korea Association of English Language and Literature, which was held January 30 through

Feb.1 in Onyang, Korea. As many attentive critics of humanities anticipate, today's meager start of ASLE-Korea might help with the crisis of humanities studies in Korea as well. By trying to articulate many kinds of ideological or cultural differences and conflicts, ASLE-Korea strives toward a better world wherein "wild nature can endure civilization."

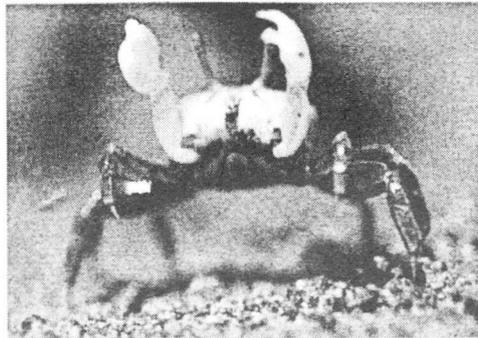
海との絆：沖縄・泡瀬干潟の保全問題をめぐって

喜納 育江 (琉球大学)

沖縄にはニライカナイという他界観がある。豊穡をもたらす神々は海の彼方にいるという世界観である。あの世とこの世は陸と海とで繋がっていて、魂はそこを往来するのだ。死んでしまった祖先や家族はみな神となり、あの水平線の彼方で、この世にいる者たちの人生と共に時を刻んでいるという感覚がここにはある。そういえば、祖母もお盆休みに私が海へ遊びに行くと言うと心配そうな顔をした。お盆には、祖先の霊がそこかしこにさまよっていて、子孫を愛するがあまり、ややもするとこの世の者をあの世へと連れて行ってしまおうと言う。「海んかいや行きしえーあらんどお。引っぱりーんどお（海へは行くもんじゃないよ。引っ張って連れて行かれてしまうよ）」という祖母のウチナーぐち（沖縄のことば）が、記憶の底から聞こえてくる。

海はあらゆる命の源であり、周囲が開かれた洋上の小さな島々においては、その民の命を育ててきた母である。海が母であるという感覚は、アメリカ先住民にとって大地が母であるという感覚に似ているかもしれない。昔から、沖縄は南国の自然の恵みに富んだ豊かな島だった。手を伸ばせば果実があり、海へ出れば魚や貝や海藻があり、それらを食べ

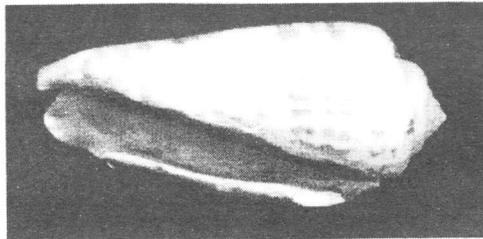
人々は貧しさの中を生き長らえてきた。海に育まれた島の生活は、ほんとうは貧しくなどなかったのである。そして、子供たちは波と戯れることによって、自分たちより大きな存在の懐へと回帰していく感覚を体得していく。やさしくからだを包む黒潮のぬくもりを感じ、寄せては返す波の声を聞き、時には塩水を味わい、潮の匂いが全身に染み入る頃にはすっかり夕日がさしている。そんな経験を繰り返すうち、岩場に現れたり隠れたりする様々な生き物が自分と同じ共同体の仲間であることを自然に受け止めるようになるのである。



ところがこの頃の沖縄は「豊かさ」の意味をすっかり見失ってしまっているようだ。全国的に干潟を保全しようとする機運が高まっているが、沖縄でも埋め立てによって徐々に消滅していく干潟への危機感が募ってきている。中でも埋め立てが決定している泡瀬干潟は、海草や藻のユニークな生態系と希少生物を多く抱える最大級の干潟とあって、干潟のある沖縄市の埋め立て決定の決議に、「泡瀬干潟を守る連絡会」を中心とした市民が根気強く保全運動を展開している。2月初旬にも、改めて市民団体から2度目の住民投票の請求がなされたが、市議会で否決され

た。一度なされた埋め立て決定に再考は必要ないし、また住民投票のための新たな条例を制定する必要もない、というのが沖縄市長をはじめとする埋め立て推進派の主張である。埋め立てによって、飛来するシギやチドリの糧となる生物を育む環境が破壊されるという懸念も、海藻の移植実験が成功の目途を得たことによってほぼ解決済みだと言うのだ。エコロジカルに無教養な政治決定によって、泡瀬干潟は、もはや埋め立て着工を待つばかりというところまで追い込まれている。

「泡瀬干潟の問題は、沖縄の人が自然との繋がりを失うか、繋ぐかという分岐点の問題であると思います。おそらく泡瀬干潟の埋め立てですら阻止不可能なら、大宜味村の塩屋湾埋め立て、名護市の普天間基地代替施設、那覇空港拡張による埋め立て、佐敷町のマリントウンプロジェクトなども問題なく進んでいくでしょう」とは、泡瀬を地元とし、泡瀬干潟の保全運動にたずさわっている桑江直哉さんの言葉である。生物多様



性においては世界一と言われる沖縄の海は、同時に世界でも最も破壊が危惧されている地域として警告を受けている。この島々を育ててくれた母なる海を、自らの手で傷つけ、殺めてしまうかもしれない危機を、危機として受け止められるか否か。泡瀬干潟の問題はこの場所の存続にとっての試金石と言っても過言ではない。

潮のすっかり引いた泡瀬干潟では、無数の生命がそれぞれの生を営んでいる。うらかな陽光を浴びてつややかに濡れる緑のアオサや海草。小刻みにひしめき動くコメツキガニの群れ。潮風のそよぐ青空をゆっくりと泳ぐシギ。ひとつひとつの動きに心を奪われつつふと遠くに目をやると、水平線がなんだかとても近く感じる。彼方にはニライカナイ——そこでは、私たちの祖先が過去の物語を語り合っているそばで、まだ生まれ得ぬ生命が、未来の物語を語る時が訪れるのをじっと待っていることだろう。

"Coming Nearer the Ground: An ASLE Symposium on the South"

ASLEシンポジウム報告

(ミシシッピ州オックスフォード、2001年10月25～27日)

茅野 佳子 (明星大学)

9月の同時多発テロ事件の影響と相次ぐ炭素菌騒動で不穏な空気の漂う中、ミシシッピ州オックスフォード(フォークナーの故郷)で、3日間のASLE南部シンポジウムが開催された。シンポジウムの冒頭の挨拶の中で、今回のテーマとなった"Coming Nearer the Ground"という一節を含むWendell Berryの詩、"Song in a Year of Catastrophe"が紹介された。このテーマが決められたのはテロ事件よりずっと以前のことなのだが、「大地にもっと近づいて」と呼びかける「声」が「大地の中に深く沈んでいった時失われたものがすべて蘇るだろう」と結ぶこの詩は、テロ後の世界に「再生」の可能性を示唆しているようで印象的だった。

大会とは対照的に、今回のシンポジウムの参加者は約40名と小規模で、同時進行の他のセッションを設けずに、ほぼ全員による発表(3人ずつのパネル形式)を2日間で終え、3日目は特別セッションとエクスカージョンがあった。合間に南北戦争以前の建物の残るキャンパスや町の散策、食事、ゴスペル・コンサート、作家のリーディングなどが用意されて、参加者との交流を深めることができた。個人的なことだが、会場になったミシシッピ大学は私が数年間在籍し学位を取った母校でもあるので、友人や恩師(その多くが今回のシンポジウムに参加していた)にも再会でき、感慨深い3日間だった。

シンポジウム全体の印象は、南部の「語りの伝統」("storytelling tradition")の健在ぶりが強く感じられたことで、アカデミックな研究発表と参加

500名近くが参加した大規模なアリゾナでの

者自身のナラティブ（詩やエッセイ形式のネイチャー・ライティング）が同等の比率を占めた。中には両者がジャンルを越えてひとつのパネルに組み込まれているセッションもあり、南部の自然と人間との関わりが異なる視点から異なる形式で語られ、全体として効果的なパネルになっていた。2日目最後に行なわれたこのパネルは、まず南部特有の沼地（swamp）に囲まれて育ったという発表者が、クレオールとしての自分の家族の生活を振り返り、土地が性格形成に及ぼす影響や土地と結びついた歴史を一人称で語り（内からの視点）、次いで南北戦争中に北軍兵士が見た南部の自然を当時の手紙の中に探った研究論文（外からの視点）の発表があり、最後に長距離トラックの運転手だった父の見た南部（動く視点）を、息子である発表者が三人称で語るというものだった。

アメリカ文学においてひとつのジャンルを作り上げた「南部」は、これまで様々な分野で研究の対象とされてきたが、環境文学やエコクリティシズムの視点からの研究はまだ十分になされているとは言えず、今回のシンポジウムは、参加者が南部の自然と文化に触れ、意見を交換し、今後の研究への問題提起がなされた点で意義深い。ちなみに、ミシシッピ大学のフォークナー研究家Donald Kartiganer教授によると、毎年7月末にミシシッピ大学で開催されるフォークナー・コンファレンスの2003年のテーマは、「フォークナーとエコロジー」が予定されているそうなので、この場を借りて報告しておきたい。

シンポジウム第1日目の最初のパネルは、ネイチャー・ライティングの多様性に関してで、まずScott Slovicが、モンタナ在住のネイチャー・ライターとして知られるRick Bassの作品の中に、8年間暮らしたミシシッピの影響が見られることを指摘した。Bassは、以前暮らした場所のイメージを現在いる場所に重ね、離れた場所の間に共通するものを見出し、「南部の言葉」を用いることなく「南部」を描いている場合があるという。

次いで、Allison Wallaceは、サウスカロライナ生まれの作家Franklin Burroughsが記憶の中の自

然や出来事を書き留めたBilly Watson's Croker Sackの特徴を、ノンフィクションでありながらフィクションの要素をもつネイチャー・ライティングと定義し、「クリエイティブ・ノンフィクション」または「ノンフィクション的小説」というジャンルについて考察した。またこの作品では、散文と詩、小説と歴史物語といったボーダーも曖昧になっていることを指摘した。

今回のシンポジウムのオーガナイザーのひとりであるDixon Bynumは、スライド上映を交えながら、Mark Twainの*Life on the Mississippi*と、当時盛んに作られたパノラマの中の川の風景に関する研究発表を行なった。スライドに映し出されたパノラマの絵の中には、ランドマークのようにミシシッピ川の向こう岸にインディアンの塚があったり、川の中にインディアンの頭が見え隠れするものがあり、アメリカが領土を拡大しながら地方を国家の枠に組み込んでいこうとした意図が読み取れるという。一方Twainは、歴史上の事実や統計的数字を駆使して新しい国家を神話化しながらも、地方の風景（特にミシシッピ川）が国家主義のプロパガンダに利用されること、つまり国家による川の所有と支配に対して批判的だったという指摘があった。

この後、ミシシッピ大学でアメリカ詩を教えているPeter Wirthが、ジョージア州生まれの詩人Sydney Lanierの詩の朗読と解説を行ない、宗教的色彩の濃い詩の他に農場で働く農夫の生活を詠んだ素朴な詩（とうもろこしを育てる農夫の詩など）を紹介した。シンポジウム参加者による、主にミシシッピでの経験を語る詩やエッセイの発表が続ぎ、昼食をはさんで午後の部が始まった。

人と土地の所有をめぐる問題を扱ったパネルでは、まずRobert CummingsがFaulknerの*Go Down, Moses*を再考察した。土地は物理的の所有の概念を越えたものであり、少年期に森の中の狩猟体験を通して森を精神的遺産として受け取ったIkeが、最後に木が切り倒され開墾された森の中で土地相続を放棄したのは、物理的な土地の放棄だけでなく精神的遺産としての森への責任をも放棄したのだ



という見方を示した。同じパネルでJohn Smithは、木も建物も覆い尽くしてしまう葛（英語で" kudzu"と呼ばれる）に代表される南部の風土（成長も腐敗も驚くべきはやさで起る環境）は、人も文化も飲み込んでしまうパワーがあり、今後の新しい南部研究の鍵になることを示唆した。Robert Mellinはこれまでのエコクリティシズムに欠けていた、「環境的不公正」("environmental injustice")の観点からのアフリカ系アメリカ人文学の研究を、今後の課題として提示した。

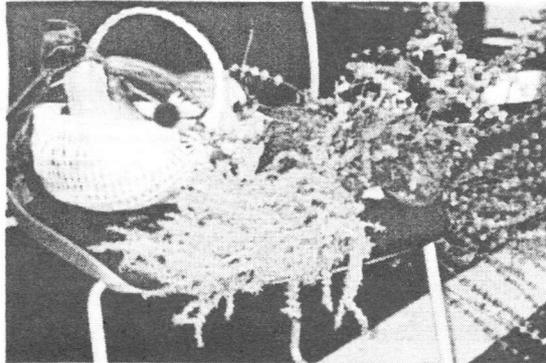
第1日目の最終セッションは、ミシシッピの農場に生まれ育った作家Larry Brownが、初のノンフィクションである最新作*Billy Ray's Farm*の一部を朗読した。T シャツにジーンズ姿の日に焼けたBrownが、南部訛りの強い英語で語る自分自身と家族の物語は、土地とそこに生きるもの（特に人と動物）との切り離せないつながりをユーモアたっぷりに描き出していた。

その後、ミシシッピ名物ナマズ (catfish) 料理の店で食事をし、グラミー賞にノミネートされたというミシシッピ大学のゴスペル合唱団のコンサートを聴き、「南部」にどっぷりと浸って長い1日を終えた。

2日目のセッションは、「虫、犬、キノコ---南部について書くこと」というタイトルのもとに、3人の発表者によるネイチャー・ライティングの朗読で始まった。スカトロロジー的でブラックユーモアを感じさせるオックスフォード在住のGabriel Guddingの詩は、身近な「虫」("insects"ではなく"bugs")と人間との関係をユニークな視点で描き、笑いの渦を起こした。犬と暮らし始めたことで生じた生活の変化を静かに見つめるオックスフォード・イーグル紙の編集員Kristen Hardyのエッセイに続き、ケンタッキー出身のWes Berryは、エッセイの中で子どもの頃父親と「キノコ狩り」("dry land fishing"と呼んでいた)を楽しんだ記憶を呼び戻しながら、その後木材の伐採により姿を消してしまった「アミガサダケ」("morel")を悼んだ。

2日目の南部エコクリティシズムの焦点は、「貧困、精神障害、暴力---南部のアイデンティティーを評価する」と題するパネルの中で提示された「環境的不公正」の問題だった。Annie Ingramは、アメリカ西部を中心とする環境文学では自然の中での

豊かな体験や自然と人間の健全な関係（「環境的公正」"environmental justice"）が対象となるが、南部文学では、貧困、人種差別、精神障害、暴力といった「環境的不公正」に関わる問題が取り上げられることを指摘した。貧困は土地の荒廃をもたらす食生活に悪影響を及ぼす。進む都市化・産業化の中で自然が破壊され、生産性を高めるための化学肥料や殺虫剤散布が有害な環境を生み出し、精神や身体の問題につながっていく。同時に、自然に囲まれて育つ南部の人々は、損なわれ失われていく自然



の生態系を常に目の当たりにすることになり、それが自然に目を向けるきっかけともなるのである。

このパネルでJay Watsonによって紹介された二つの作品は、南部の貧しい環境に育つ子どもの経験を問題意識をもって描き出している。Larry Brownの*Joe*という小説は、ミシシッピ北部を舞台とする貧しい酒飲みのギャンブラーと荒廃した家庭に育った少年の交流の物語だが、自然の中に居場所と安らぎを見い出す少年の目に映った森の変容（美しい自然林が商業林に変わり生態系が破壊されていく様子）

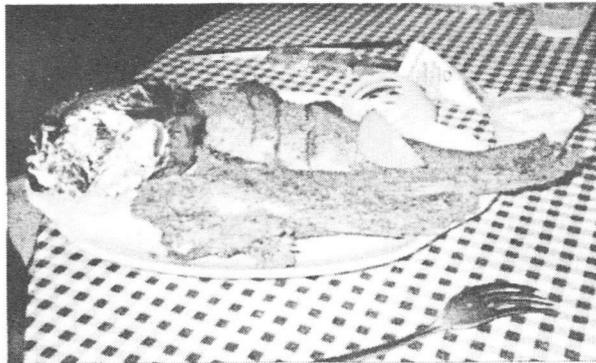
は、Jannis Layの*Ecology of a Cracker Childhood*に描かれた、ジョージア州南部の松林で廃品に囲まれて育った少女の体験と重なる。また、Ingramの発表の中では、前日に続いて、アフリカ系アメリカ人文学の環境文学的研究を促す提言もなされたことを付け加えておく。

「南部の詩人と詩」というパネルでは、ジョージア州生まれの2人の詩人、Kathryn Stripling ByerとJames Dickeyの詩に見られる南部の土地と女性の結びつきに関する発表があり、筆者（茅野）はミシシッピ生まれのアフリカ系アメリカ人作家Richard WrightのHAIKU（英語による俳句形式の詩）についての研究発表を行なった。抗議文学の旗手として文壇にデビューし、ペンで闘う姿勢を貫いたWrightは、飢えと人種差別の中での悲惨な子ども時代を思い出すから田舎は嫌いであると公言し、都会に住み続けた。しかし晩年パリでの闘病生活の中で書いた4000ものHAIKUには、故郷ミシシッピの風景が穏やかに描かれているものが含まれている。そんなWrightの精神の軌跡を、初期の自

伝からHAIKUに至る自然描写の中に追った。

2日目の晩は、オックスフォード・スクエアのギャラリーを借り切ったのディナーの後、アラバマ生まれの詩人Rodney Jonesの朗読があった。Jonesは、1999年に出版したナラティブ・ポエム*Elegy for the Southern Drawl*の一節を朗読し、生まれ育ったアラバマの言葉で、自らの若き日と消え行く南部に対するアイロニーたっぷりのエレジーを披露した。

最終日の朝のセッションは、「ミシシッピ大学の教育現場における南部の環境問題」をテーマに、六人の教授陣による円卓討論会が行なわれた。今回のシンポジウムの世話役を勤めた英文学部の Ann Fisher-Wirth教授が司会を勤め、パネリストとしては、学際的な南部研究プログラムに関わっている文学、歴史、文化、人類学等を専門とする5人の教授が参加した。各自の専門分野と関心事項の紹介の後、ティーチングの実践、南部の環境問題へと話題は及んだが、中でも環境問題に対する意識が何故南部では生まれにくかったのか、そして今後に残されている課題は何か、という点に議論が集中した。ミシシッピ（南部）では、土地は生きていくために「使われるもの」つまり「道具」であったこと、奴隷制度から小作農制度に移行し、土地を所有する者が耕作に直接携わってこなかった歴史、ヨーロッパの伝統を受け継ぎ人間中心の価値観が根強く残っていたこと、などが理由として挙げられ、遅れているリサイクリングやデルタ地区で大量に使用されてきた殺虫剤、「環境人種主義」("environmental racism")の問題などが課題として言及された。



ナマズ料理

シンポジウムの最後を飾ったのは、最近ミシシッピ州の各地で行なわれるようになった「持続的農業」("sustainable agriculture")の実践報告だった。デルタ地区を中心に広大な綿花畑の広がるミシシッピ州では、最近まで野菜の栽培はほとんど行なわれていなかったそうで、そういえば私が住んでいた90年代には、地元の野菜を直販するファーマーズ・マーケットのようなものは全く見られず（他州

ではよく見かけた）、新鮮で安価で安心な無農薬野菜や果物を見つけるのは難しかった。ケロッグ基金の助成金で始まった「ミシシッピを緑にする」("Growing a Greener Mississippi")プロジェクトにより、ニューヨークから派遣されたコンサルタントの指導のもとで、地元で農業を営む人々の間に化学肥料や農薬を用いない農業の実践が始まり、地元での市場を広げていったという。今ではオックスフォードの町でも週末にファーマーズ・マーケットが開かれるそうだ。化学薬品や農薬を使わない農業から有機栽培へ、プロジェクトは現在も進行中である。

ちょうど収穫の時期でもあったので、収穫された種々の野菜や穀物、ハーブなどが会場に運ばれ展示された。また、MEGA (Mississippians Engaged in Green Agriculture)というネットワークが組織され、ニューズレターが発行されるようになって、豆類など土壌に窒素を供給する植物を"cover crops"として植えることについての特集を組んだり、情報交換の場を提供していた。コンサルタントを勤めてきたNan Johnsonと地元のディレクターDorothy Gradyは、ミシシッピの人々がもともと土地とのより良い関係を取り戻すことを強く願っていたのだということ、そして、このプロジェクトが近代農業によって傷ついた土地と人間に「癒し」をもたらし、食生活や環境意識にも改善が見られることなどを語った。

1962年に初めての黒人学生James Meredithの入学をめぐって連邦軍と戦闘状態になり、人種差別大学として有名になってしまったミシシッピ大学では、人種関係改善のための努力がいろいろな形で続けられているが、化学肥料や農薬の使用で荒れてしまった土地に対しても、このように改善の努力が始まったことを嬉しく思った。かつて洪水による侵食を防ぐため日本から輸入された葛が、恐ろしいくらい繁殖し根付いてしまうほど肥沃なミシシッピの土地と、ダイナミックな四季の変化を見せてくれる美しい自然が守られ、そこに住む人々と土地とのいい関係がいつまでも続いていくことを願わずにはいられない。

午前中ですべてのセッションが終わり、午後のエクスカージョンでは、ミシシッピ州北部からテ

ネシー州メンフィスの北部を抜けてミシシッピ川に注ぐウルフ川のカヌー下りが人気を集めていた。ウルフ川は、南部に残る数少ない野生のままの支流で、イトスギとニッサ（オオギリ科の木）の生い茂る沼地を含む。日本を発つ前からひどい風邪をひいていた私はカヌー下りをあきらめて、ミシシッピ州北部ホーリー・スプリングズにある、もと綿花のプランテーションだった土地を訪れた。1998年にオーデュボン・ソサイエティに寄贈されストロベリー・ブレインズと名付けられたこの土地には、南北戦争前のマンションと小作農の小屋が修復され、自然保護センターができていた。ここでは、外来の植物を排除し、ミシシッピ原産の木や植物だけの森を取り戻



奴隷のお墓

す試みがなされ、絶滅の危機にある動物の保護も行なわれていた。散策した広大な敷地には、奴隷だった人々の墓地があり、小さな古い墓石が自然の一部のようにひっそりと並んでいた。

シンポジウムの始まる前夜は、竜巻警報が出て嵐になり天候が気になったが、翌日からはインディアン・サマーの暖かい日が続いた。朝晩はめっきり冷え込んで、数日の間にキャンパスの木々が黄金色に色づいていた。その中に葉を赤く染めた花水木（dogwood）を見つけた時、在学中道路拡張のため古い花水木が切り倒されるのに反対し、大学関係者や町の人とプラカードを持ってデモ行進したことを、なつかしく思い出した。

Book Review

The Ecolinguistics Reader: Language, Ecology and the Environment.
Fill, Alwin & Mühlhäusler, Peter, eds.
London: Continuum, 2001.

The concept of 'the language of ecology' was created by the Norwegian-American linguist Einar Haugen in 1970. He was interested in the ecological study of the interrelations between languages in bilingual and multilingual communities. In subsequent decades, the range of applications of the concept of 'ecology' within linguistics has broadened considerably. Most recently, the vital topic of environmental degradation has been added to the list of linguistic concerns. During the 1990s, all the various different approaches which link language to ecology were brought together into a unified branch of linguistics called 'ecolinguistics.'

Until the publication of this book, anyone interested in the relationship between ecology and linguistics was faced with the difficult task of searching out the articles on the subject in a variety of obscure journals and book chapters. This Reader fulfills a valuable function by gathering together in a single volume some of the most important

articles in this field, including several newly translated into English from the original German.

The Reader is divided into four parts. The first section, "The Roots of Ecolinguistics," contains texts by two forerunners of ecolinguistics, a survey article and a review article. It begins with an essay from 1912 by Edward Sapir which represents an early attempt to establish a relation between 'Nature' and language. Alwin Fill's "Ecolinguistics: the State of the Art 1998" provides a clear overview of different branches of this field and evaluates their achievements. The review article by Peter Mühlhäusler discusses and criticizes the language resources available for talking about the environment in the main European languages.

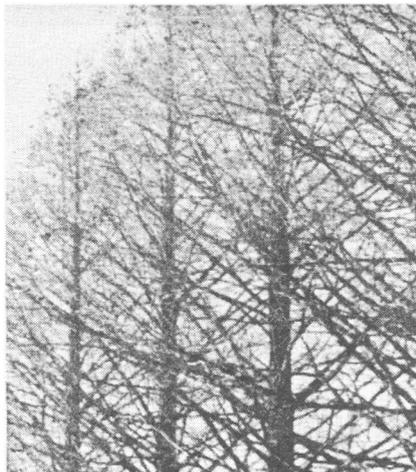
The second section, 'Ecology as Metaphor,' contains six essays which all consider the value of using 'ecology' as a metaphor for language. Beginning with Haugen's original essay, this section also includes chapters by Norman Denison, who asks whether the preservation of linguistic 'species' should be regarded as seriously as preservation of biological species, and Peter Finke, who uses the metaphor of ecology to develop his hypothesis that language is a 'missing link' between natural and cultural ecosystems. The last chapter in this section, by Wolf-Andreas Leibert, shows the effects that changes in

speakers' physical environment have on their language.

In the third section, "Language and Environment," the topic is the interrelationship between language and the natural environment, particularly concerning linguistic and biological diversity. The first two papers, by Beth Shultz and Saroj Chawla, investigate whether the destruction of the natural environment is, in part, caused by language in some way. Other articles, such as Donal Carbaugh's, remind us that language can also be used both to exploit nature and to create solidarity between humans and their environment.

The final section of the book is called "Critical Ecolinguistics." In their introduction to this section, the editors point out that even before the advent of critical linguistics, ecolinguists had criticized language use from the environmental point of view. However, with the rise during the 1990 of Critical Discourse Analysis (CDA), ecocritical discourse analysis has become a thriving field of study, with numerous studies focusing critically on the unecological ideologies of a variety of texts such as political speeches, green advertisements, etc. This section contains a representative selection of such articles. Mary Kahn's study of the absence of active verbs and personal pronouns in scientific articles on animal testing ('upon death, coyotes were skinned' rather than 'after we killed the coyotes we skinned them') shows how soulless scientific writing is, while Tzaporah Berman's article "The Rape of Mother Nature? Women in the Language of Environmental Discourse" is an example of ecofeminist criticism. The section ends with Matthias Jung's article "Ecological Criticism of Language" which takes a critical look at eco-criticism itself and warns critical linguists against ideological self-righteousness.

Edward Haig
Nagoya
University



菜食主義の背景を考える 欧米における動物観・生命観について

関口 敬二 (大阪府立大学)

かねてから欧米と日本では、動物に対する考え方に何かしら相違があると思っていた。今回、ソロと宮沢賢治の菜食主義に関する比較分析（『文学と環境』No.4）を通じて、人間と動物との距離感に両者には大きな違いがあることを改めて感じた。それは、ひいては生命観の違いでもあろう。近年話題になっている臓器移植に対する考え方の違いにもそれは端的に現れている。欧米では、人間は死ぬと靈魂は天国に召されるので、残った体は単なる物体、抜け殻に過ぎないと考えられるからこそ臓器を摘出することに何ら抵抗感、罪悪感はない。いくら愛する人であっても一端死ぬば単なる物体にしかすぎなくなるというモチーフは、アメリカの作家ヘミングウェイの作品に、例えば、『武器よさらば』の最後の場面や短編「アルプスの牧歌」などにしばしば出てくる。また、「遺体」という概念も日本独特のもので、英語には日本語の遺体に相当する特別な言葉はない。全てボディである。飛行機墜落事故の際に、あくまでも遺体の回収にこだわるのは日本人だけだと聞いている。そういえば、去年「えひめ丸」衝突事故の際、遺体の捜索、回収に関して日本とアメリカではその対応に大きな差があったことは記憶に新しい。

動物観に限ってみると、その相違が端的に現れるのは、例えば菜食主義に関して賢治が「ビヂテリアン大祭」で分類した予防派と同情派の違いにある。すなわち、同じベジタリアンであっても自分の健康のために肉食をやめると、動物を殺すのがかわいそうだから肉食をやめるといふのでは、その動機に大きな違いがある。また、動物を殺す際に罪の意識を感じるかどうか、すなわち動物殺生に対する罪悪感の有無においても動物観の差が現れる。賢治の場合には、動物殺生に対する強い罪悪感があった。それは彼が信仰した仏教、中でも不殺生戒や輪廻転生の思想が大きく関わっていた。賢治の場合、輪廻転生の過程においては人間も動物も親子兄弟の関係にあるという認識にまで至っている。それに対し、欧米では動物殺生に対してそれほど大きな罪悪感はないのではないか。人間と動物とは全く別物であるという意識があるのではないか。この背景には、欧米の哲学、宗教が大きく関わっていると思われる。フランスの

哲学者デカルトの動物機械論（人間だけが理性を持ち、動物は時計のように動く単なる機械にすぎない。したがって、人間が罪もない動物を虐待しても不問にされる）やキリスト教の動物に対する人間優位の思想が欧米人の根底にあるのではないか。アメリカの科学史家リン・ホワイト・ジュニアは、「現代の生態学的危機の歴史的起源」がキリスト教の創世記（神は天と地と全ての生き物を人間の支配と利益のために造った）にあるという欧米人にとってショッキングな報告をした。これに対して、オーストラリアの哲学者ジョン・パスモアは、スチュワードシップ（人間は神の代理人として動植物を管理する責任者である）という概念を提出して反論を試みたが、この反論は、基本的には、キリスト教の人間中心主義を少しでも相対化しようという試みにすぎない。

もっとも、キリスト教の歴史の中にも、人間と動物、両者の生命を平等に尊ぶ思想は流れている。13世紀のアッシジの聖フランチェスコは、小鳥に説教したことで有名であるが、神に造られた全ての事物が、等しく神を讃美する能力をもつとする「靈魂の平等主義」を唱えた。また、シュヴァイツァーは、医者として赴いたアフリカで「生命への畏怖」に目覚め、「罪意識を持たずしては、一枚の木の葉も、一輪の草花をもむしらず、また一匹の虫をも踏みつけることがなかった」と述べている。ただし、動物の生命を大切にするといってもそれにも問題点がある。シュヴァイツァー博士が「生命への畏敬」を信じて、蠅や蚊を退治しなかったために、彼の病院での産婦の死亡率が異常に高かったという報告がある。これは、動物の生命を尊重するといっても、蠅や蚊、また毒ヘビや害虫など人間にとって有害なものまでも含めるのかどうかという問題である。生態系（生命）中心的自然観を突き詰めてゆくと、必ずこの問題にぶつかってしまう。また、近年の環境保護思想ディープ・エコロジーも生命圏平等主義（あらゆる生命体には固有の価値、生物種としての平等性がある）という立場をとっているが、提唱者アルネ・ネス自身、この平等主義はあくまでも「原則として」であって、人間が生きてゆく上で生じる他の生命体の若干の殺戮は仕方がないとしている。

欧米における動物殺生に対する罪悪感の希薄さ

に関して今一つ興味深い事例として、先程も触れたヘミングウェイの場合を少し考えてみたい。彼は、若い頃からフィッシングやハンティングに夢中になり、さんざん動物を殺生してきた。それは、作品の中にもしばしば描かれている。たとえば、初期の作品「大きな二つの心をもった河」では、主人公ニックが何も考えずに淡々と鱒を殺す場面が描かれている。ところが、晩年の『老人と海』では、これまで一度ももらしたことのなかった動物殺しへの後ろめたさが描かれている。「それにしても、かわいそうなことをした、おれは魚を殺してしまったんだ。……たぶん罪なんだろう、魚を殺すってことは。たとえ自分が食うためであり、多くの人に食わせるためにやったとしても、罪は罪なんだろうな。……お前が魚を殺すのは、ただ、生きるためでもなければ、食糧として売るためだけでもない。お前は誇りを持って奴を殺したんだ。漁師だから殺したんじゃないか。お前は、奴が生きていた時、いや、死んでからだって、それを愛していた。もしお前が愛しているなら、殺したって罪にはならないんだ。それとも、なおさら重い罪だろうか、それは？」あれ程長年にわたって魚釣りや狩猟という快樂にのめり込んでいたヘミングウェイが、晩年になってこのような罪の意識を抱くようになったのはなぜだろうか。



か。それは、この作品の前半部で老人が小鳥や海に住む様々な生物のことを考えながら積み上げて行く思索に関係があると思われる。自然の生態系の中で生物が生きてゆくためには、他の生物を殺したり、あるいは自分も殺されなければならないという認識、つまり自然界においては万物が互いに殺し、殺される「存在の連鎖」関係にあり、その点では人間もその連鎖の一員であるという認識に至っている。このように、『老人と海』には、動物殺生に対する罪の意識、生態系（生命）中心的自然観（エコロジー思想）など、ヘミングウェイ

イの晩年の動物観・生命観を考える上で絶好の材料を与えてくれる。

ここでは、動物観の違いについて最近考えていることを若干述べたいと思う。人間と動物の関係をどう見るかと言うことについては、基本的に二つの考え方がある。一つが動物を人間と対等のものだとする生命中心主義あるいは生態系中心主義、もう一つは人間の利便のためには動物を殺すのは仕方がないとする人間中心主義である。

後者の考え方の代表は、フランスの哲学者デカルトの動物機械論である。彼によると、人間だけが理性を持ち、動物は時計のように動く単なる機械にすぎない。したがって、人間が罪もない動物を虐待しても不問にされる。「動物は無感覚で、非理性的な機械である。」「動物は機械のように動くが、痛みを感じることはできない。」さらに、「動物は精神がないので、危害を加えられてもそのことを感じることはできない。」（『方法序説』第五部）彼は、「我思う、故に我あり」を公理とし、人間の思惟能力を絶対視した。したがって、思惟能力をもつ人間がその能力を持たない人間以外のもの、すなわち動物を含め自然界にある全てのものを支配するのは当然となる。「人間は自然の支配者であると同時に自然の所有者でもある。」このようにデカルトは、人間と自然とをはっきりと区別し、人間が自然を自分の都合のいいように利用する思想的な基盤をつくったと言える。

また、デカルトに劣らず動物の生命を軽視する原因となったと思われるのがキリスト教の思想である。アメリカの科学史家リン・ホワイト・ジュニアは、1967年『サイエンス』誌に「現代の生態学的危機の歴史的起源」という短いショッキングな論文を寄せた。現在の環境危機の元凶はユダヤ・キリスト教の人間中心主義にあるというのである。彼は、創世記第一章二八節の「神は彼ら（人間）を祝福して言われた。生めよ、殖えよ、地に満ちよ、地を従わせよ。また海の魚と、空の鳥と、地に動くすべての生き物とを治めよ。」を根拠に、神は、天と地と全ての生き物を人間の支配と利益のために造ったと解釈した。



彼によると、ヨーロッパのキリスト教は、「世界がこれまで知っている中で最も人間中心的な宗教であり」、キリスト教は、人間を自然の一部とみなす古代の異教やアジアの宗教とは違って「人間と自然の二元論を打ち立てただけでなく、人間が自分のために自然を搾取することが神の意志であると主張したのであった。」

これに対して、反論も相次いだ。

ルネ・デュボスは、創世記第二章は、第一章とは異なる倫理を含み、そこでは神は「エデンの園に人間を主人としてではなく、管理人の精神を持ったものとして置いた。」（キャロリン・マーチャント、97）とした。また、オーストラリアの哲学者ジョン・パスモアは、『自然に対する人間の責任』において、「人

間は神の代理人として羊飼（スチュワード、執事）の役目を与えられた動植物を管理する責任者である。」（48）と述べ、人間は神の代理人として世界を世話することを委託されているという解釈を提出した。人間を自然的世界の管理人(steward)や世話役(caretaker)とみなす考えは、リン・ホワイトの述べる「むきだしの支配の倫理」とは対立する。しかし、これらの反論は、基本的には、人間中心主義を少しでも相対化しようとする試みとして総括できるだろう。

ただし、キリスト教の歴史の中にも、生命を平等に尊ぶ思想が流れている。一三世紀のアッシジの聖フランチェスコは、小鳥に説教したことで有名であるが、神に造られた全ての事物が、等しく神を讃美する能力をもつとする「靈魂の平等主義」（ロデリック・ナッシュ、189）を唱えた。「被造物の讃歌（太陽の歌）」では、太陽も月も大地も草も生物、無生物を問わず全ての被造物が我々の兄弟姉妹であり、宇宙全体がみな一体であることが述べられている。

また、シュヴァイツァーは、医者として赴いたアフリカで「生命への畏怖」に目覚め、「罪意識を持たずしては、一枚の木の葉も、一輪の草花をもむしらず、また一匹の虫をも踏みつけることがなかった」と書いている。彼は、「倫理学は、ただ人間と人間社会に対する態度にのみかかわるだけである」という従来の西欧の伝統的倫理学の、あまりにも人間中心的な「狭量さ」を批判し、今や倫理とは「生きている全てのものに対する無際限に拡大された責任」（281）でなければならないとした。

これから始めようとする人のための フィールドガイド

ふと見かけた野草が気になって名前を知りたくなる。そんなときに必要なのが図鑑やフィールドガイド。巷にあふれてはいるものの、どれを選べばよいのか迷うところだ。そこで、何か適当なものかと思っている人のためにヒントを少しだけ。ただし、あくまでも個人的嗜好による。

第一に、欲ばらないこと。昨今のアウトドア・ブームを受けて動植物をあれもこれもと一冊に収めているものが近ごろやたらと眼につくが、これは避けたい。どうしても不満が残る。植物なら植物だけ、昆虫なら昆虫だけの本が圧倒的によい。第二は、解説がわかりやすい言葉で書かれ、しかも生息環境や生態への言及があるものを選びたい。最初から難解な解説に出くわすと、じきに放り出すこと必至である。第三に、図版が写真であるか絵であるか。撮影技術も印刷技術も優れたものが多いことは承知の上で、特に植物の場合は絵の方を勧めたい。花や葉の色、形状、それに全体の姿は写真だと何かと分かりづらい（とはいえ、かつて山溪から出ていた富成忠夫のフィールドガイド数冊、あれは写真も編集方針もよかった）。鳥についても同じことが言える。おまけに、精密で美的感覚に訴える彩色画は、それを眺めるだけでも楽しい時間が過ぎせる。最後に厄介なのが値段。これは懐次第だが、初心者にふさわしいのは2,500円前後がひとつの目安か。

というわけで、便利なものを実際に挙げるとすれば、小学館の自然観察と生態シリーズ、自然観察シリーズがまず思い浮かぶ。これは上記の条件をほぼ満たしているし、持ち歩くにも手ごろだ。そして「葉はさや状の基脚部と皮針形の葉身部からなり、…」といった記述に抵抗がなくな

【図鑑特集】

れば、北隆館のコンパクト版原色図鑑シリーズ（たしか全11巻）。どれも5,000円弱と高めだが、情報量は豊富だし、あの牧野植物図鑑も二分冊で収められている。その他、保育社、山と溪谷社もこの領域に力を入れているので探してみたい。また、小学館や学研の学習図鑑シリーズも妙なこだわりをもっていて馬鹿にできない。とにかくも要は店頭で実物を手にとること。あれこれ比較検討すれば、好みにかなう一冊がきっと見つかるはずだ。三木卓氏による昆虫のフィールドガイドもあつたりするし。

外国に眼を向ければ、アメリカのフィールドガイドはお馴染みの人も多いだろうが、イギリスのもので引き込まれるのが R. Mabey, *Food for Free* (Harper Collins, 1972)。薬用・食用植物（と、なぜか貝）の紹介に伝承や民俗誌が豊富に盛り込まれていて、生活感が匂ってくる。さすがはメイビー。美しい図版もこの国の植物画の伝統を偲ばせる。これが版を重ねていることにも、イギリスのしたたかな文化を感じたりして。この種の図鑑が日本にもあれば、と願わずにはいられなくなる。



とにかく、落ち葉や冬芽、ドングリはまだしも、ゲンゴロウや蝶・蛾の幼虫まで網羅するのが図鑑のこだわり。その深遠なるオタクの世界へ第一歩を踏み出すのも悪くはない。ちなみに私自身の愛読書(!)は横山光夫『原色日本蝶類図鑑』(保育社、1954年)。もちろん絶版で眼にする機会もまれということで、序の一部を披露すれば、「いつか敗戦の焼跡には街路樹が芽ぶき、草原の街にも泪ぐむ瞳のような灯が光った」。この美文調から何十年も抜け出せないでいる。今からすれば冴えないカラー写真もあのころは新鮮だった。

IKUTA, Shogo (Kanazawa University)

書誌情報 2

◆中沢新一『人類最古の哲学』（講談社選書メチエ、2002）

中央大学で行なわれた「比較宗教学」の講義をまとめたものだろうか。神話の再評価が叫ばれるようになって久しいが、この本も、神話を人類の知恵が埋めこまれた「はじまりの哲学」とみなし、縦軸にはレヴィ＝ストロースの「野生の思考」を、そして横軸には南方熊楠のコスモロジーにおいて、その延長線上で人類の歴史と神話の変形を探ってゆく。最終章では、神話の現代的な意義について考察する。（高橋勤）

◆福岡賢正『国が川を壊す理由——誰のための川辺川ダムか』（葦書房、1994）

近ごろ気になるのが、川辺川ダム計画のゆくえ。国土交通省と球磨川漁協幹部との間で水面下の交渉が行なわれているのだろうが、このダム計画の不当性、非合理性、そして時代錯誤性を徹底的に検証したのが、この書。具体的なデータに基づいて、治水、利水、あるいは電力供給というダム建設の「大義」をひとつひとつ論駁していく過程は、圧巻である。川辺川ダム反対運動に、科学的な論拠を与えた好著。「まえがき」は野田知佑。（高橋勤）

◆石牟礼道子『煤の中のマリア——島原・椎葉・不知火紀行』（平凡社、2001）

島原、天草、椎葉、不知火という地名のなつかしい響き。石牟礼さんというと、すぐさま『苦海浄土』を連想してしまうのだが、より正確には、九州的なもの、九州の風土や土着性を文学にされたといったほうがいいのかも。水辺が「水際」に変わったとき、人間の環境に対する意識も変わった、とはある生態学者の言葉だが、石牟礼さんの記憶の風景には、つねに「水辺」が存在する。（高橋勤）

◆原 剛『農から環境を考える』（集英社、2001）

「農業は環境の守り手か、破壊者か」と筆者は問いを発し、「環境の保護と農業生産の維持は、一心同体の関係にある」と結論づける。持続可能な農業をどのように実現できるか、その可能性を探り、デカップリングや市民農園の拡充などさまざまな角度からの提言をしている。食糧問題を、

第三者ではなく当事者としてどのように受け止め、関わっていくかあらためて考えさせられた。（廣田栄克）



◆天野礼子『いらない 公共事業にレッドカード』（集英社、2001）

諫早湾干拓、川辺川ダム、長良川河口堰、下諏訪ダム、神戸空港、大規模林道、整備新幹線、etc.の無駄な公共事業の現況が報告され、海を豊かにする植林、遊水池、合併浄化槽、バイオマス発電、風力発電、etc.自然再生の取り組みが紹介される。繰り返し繰り返し訴えて何年になることやら。実践に結びついた言葉からは希望が湧いてくる。（加藤）

◆山田和『瀑流』（文芸春秋、2002）

昭和初期、森と共に暮らしてきた林業者と、ダム開発を強力に進める電力会社との間の戦い「庄川ダム争議」を記録に基づき描いた小説。今書かれる意味がある。（加藤）

【映像】

▲『越後奥三面第二部——ふるさとは消えたか』

民族文化映像研究所（姫田忠義所長）1995年制作 147分（『越後奥三面——山に生かされた日々』1984年制作の第二部）

これはダムに消えた新潟県朝日奥三面の自然とそこに住む村民との時を越えた深い絆を中心に捉えながら、1984年から1995年秋にいたる11年間の村の消滅の過程を映し出す記録である。人々の暮らしの中に数百年（遺跡から考えると数千年？）受け継がれてきた生活文化を、淡々としかし重みを失わずに伝える。次々とショベルカーで容赦なく屋根が壊され、瓦が砕け散り、柱が折れ、倒れゆく映像。1985年、奥三面の家々は完全に消滅し、人々は移住地暮らし、2001年には湛水が始まった。人間の終の住処とはなんだろうか？絆は消えたのか？

本作品は自主上映のみ。問い合わせは、民族文化映像研究所 〒160-0022 東京都新宿区新宿2-1-4 御苑ビル2F TEL 03-3341-2865（廣田）

平成14年度ASLE-J/文学・環境学会全国大会のご案内

14年度の大会を以下の要領で開催します。あわせて研究発表およびシンポジウムの企画を募集いたします。

日時 10月12日(土)
13:00-18:00
場所 明治学院大学

役員会 12:50-13:30
受付 13:00-13:30
総会 13:30-14:00
研究発表 14:10-16:10
(3名を予定。各発表30分、質疑応答10分)
シンポジウム 16:20-18:00

懇親会 18:30-20:30(会場未定)



今年度はアメリカ文学会の日程との関係、学期途中であること、などのため、1日のみの開催となります。したがって講演とエクスカージョンは残念ながら計画いたしません。

お問い合わせ、および研究発表とシンポジウムのお申し出(urban natureに関するもの、あるいはそれ以外のもの、いずれも大歓迎です)は下記宛で6月末日までをお願いします。

生田 省悟

e-mail: shogo@kenroku.kanazawa-u.ac.jp

【訃報】石井倫代さん(芝浦工業大学教授)が2001年5月15日、ご病氣にてご逝去なさいま

した。享年51歳。ご冥福をお祈りいたします。

POSTSCRIPT

♠アワセメント:

調査で得られたデータを恣意的に解釈したり、実状を反映しないデータに基づいたりして、事業者の既定方針に合わせて結論を下す無意味な環境アセスメント。あちこちでよく聞く。馴れ合い、長いものには巻かれる、と目をつぶってはならない。

◆泡瀬干潟では、まだ海藻移植実験の最終結果が出ていないのに、埋め立て開始とか。アワセ以前の怒りと悲しみ。

♣自由な意見・情報交換ができる相互的ネットワーク不在の場所に、環境意識の深化、保全・復興の気運は根付かない。メーリングリストやニューズレターに投稿し、自分たちのコミュニケーションを育てよう。

♪♪ カニが店だし床屋でござる・・・♪♪

♥ご協力有り難うございました。(KT)



ASLE-Japan
文学・環境学会
Newsletter No.12

【発行】ASLE-Japan/文学・環境学会
事務局：〒903-0213 沖縄県西原町千原1番地
琉球大学 法文学部 山里勝己 研究室内
Tel & Fax: 098-895-8295
E-Mail: yamazato@ll.u-ryukyu.ac.jp

【編集】
編集代表 加藤 貞通 (KATO SADAMICHI)
〒464-8601 名古屋市千種区不老町
名古屋大学言語文化部
Tel. & Fax: 052-789-4188
E-Mail: h44558a@nucc.cc.nagoya-u.ac.jp

2002年3月20日発行